

西川津遺跡の出土品を「再整理」する

島根県埋蔵文化財調査センター 深田 浩

1. 「再整理」の目的

山陰地方を代表する弥生時代の拠点集落である西川津遺跡出土品について、非掲載資料も含めた分類・集計作業などの基礎的整理を行い、新たな公開・活用を図る。

2. 再整理対象・再整理年度

- ・再整理対象：西川津遺跡宮尾坪内地区（昭和55・56年度調査）
報告書…『西川津遺跡Ⅰ』（島根県1980）、『西川津遺跡Ⅱ』（島根県1982）
- ・再整理年度：平成29年度～令和2年度
- ・再整理成果：報告書『島根県西川津遺跡出土品Ⅰ』の刊行（令和3年3月）

3. 出土品の数量

- ・『西川津遺跡Ⅰ』：コンテナ73箱
- ・『西川津遺跡Ⅱ』：コンテナ96箱 合計169箱

4. 再整理の成果

（1）縄文土器からみた西川津遺跡（宮尾坪内地区）の動態

- ・縄文時代早期中葉から晩期末にかけて各時期の土器が出土し、縄文時代を通じた集落の継続性がうかがえる。
- ・出土量は時期によって顕著な差があり、特に前期後葉（西川津式）と晩期後葉（突帯文期）に大きなピークがある。一方、前期後葉から後期にかけては出土量が低調。
- ・出土量の推移には、気候の冷涼化に伴う地勢環境の変動が影響している可能性を指摘。

（2）弥生土器からみた西川津遺跡（宮尾坪内地区）の動態

- ・弥生土器の総量は、全時代を通じた出土土器類の総量（約845kg）うち94%（約796kg）を占める。
- ・出土量は前期後半（Ⅰ-3・4様式）にピークがあり、中期中葉（Ⅲ様式）まで維持するが、中期後葉（Ⅳ様式）に著しく減少する。
- ・後期以降は出土量が減少の一途をたどり、特に後期後葉（Ⅴ-3様式）には確実にこの時期に比定できる資料が確認できない。
- ・西川津遺跡の拠点集落は、①拠点集落の成立（前期前半）、②拠点集落の盛行（前期後半）、③拠点集落の衰退（中期後葉）、④拠点集落の解体（後期）という変遷を辿ること

が素描でき、特に中期後葉に大きな画期がある。

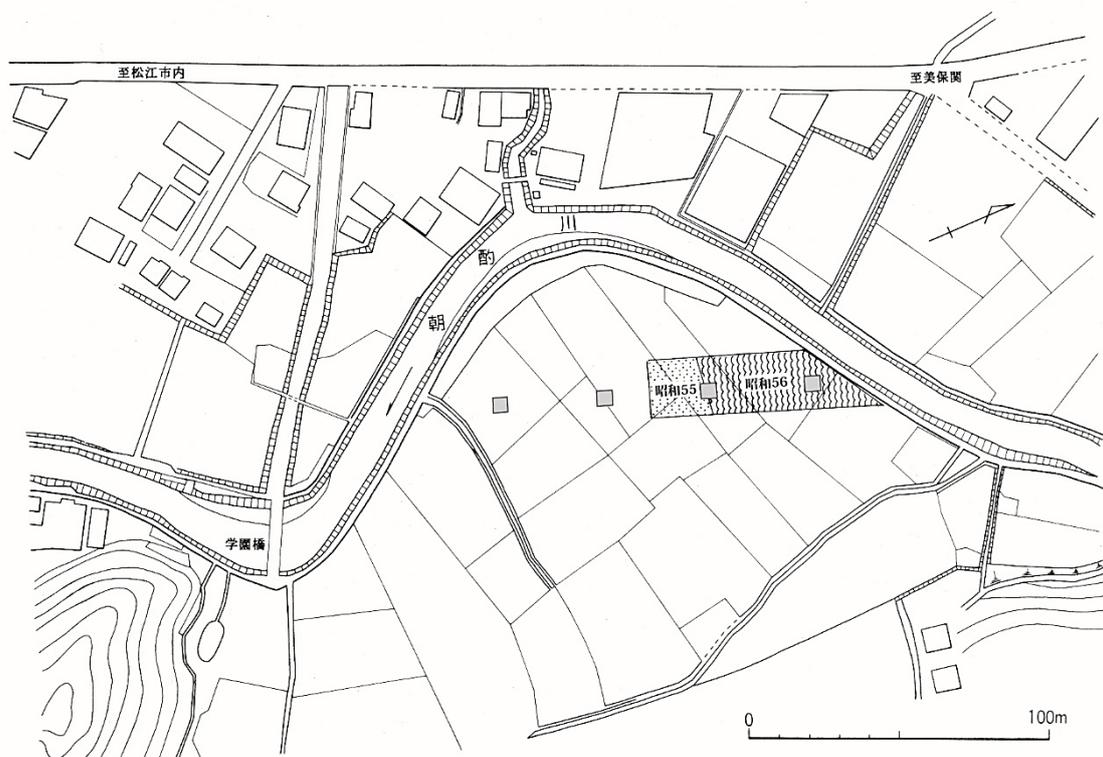
- 出土品としては、海崎地区や鶴場地区と同様に、木製農耕具や緑色凝灰岩製管玉未成品などを確認した。一方で交易・生産拠点であることを示す遺物（搬入土器、漆塗土器、鑄造鉄斧、多量の大陸系磨製石器や大型蛤刃石斧未成品等）、祭祀の場であることを示す遺物（土笛、分銅形土製品、青銅器等）、首長の存在が想定される遺物（玉類、貝輪、威儀具等）は確認できていない。
- 海崎地区・鶴場地区と宮尾坪内地区を個別の集落として捉えることができるならば、前者は西川津遺跡の中核的集落、後者はその衛星的な近接集落として機能していたことがうかがえ、今回の成果は拠点集落を構成する単位集団としての一端を反映していることが想定される。

5. 今後の課題と展望

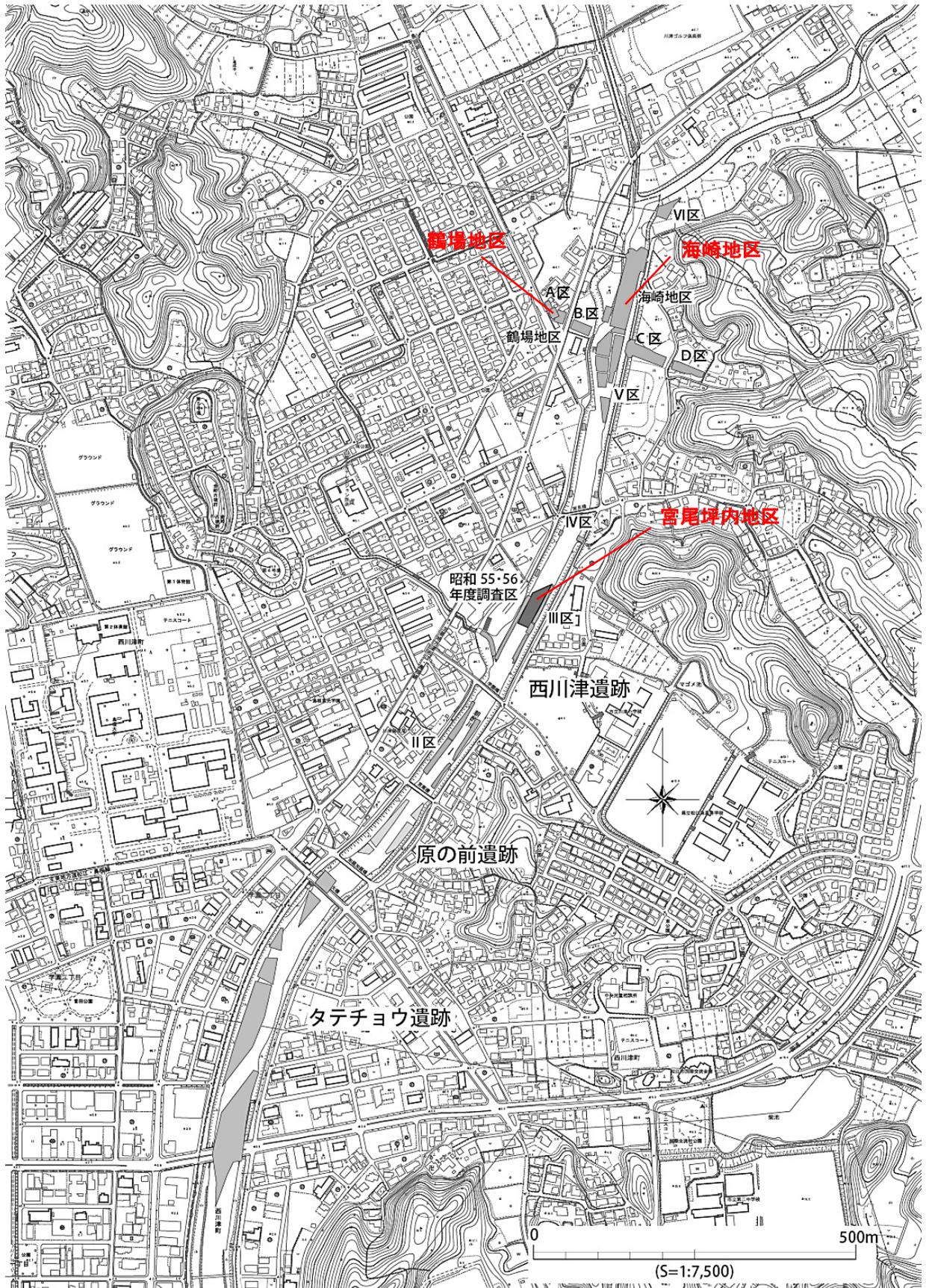
- 今回の再整理作業により、遺物出土量の推移からみた宮尾坪内地区における西川津遺跡の動態を示すことができた。
- 特に弥生時代中期後葉における集落衰退現象は意宇平野の拠点集落である布田遺跡と共通する注目すべき画期といえ、出雲平野の拠点集落である矢野遺跡など他地域の様相や、山陰の弥生時代を特徴づける他の要素（青銅器、玉生産、高地性集落、墓制など）の展開とも比較検証し、今後の山陰地域における弥生時代研究の枠組みの中で別途検討すべき課題。
- 一方で、遺物は朝酌川の河道や氾濫原からの出土であり、今回の成果が西川津遺跡の集落の盛衰をどこまで正確に反映しているかは慎重にならざるを得ない。
- 今後は西川津遺跡の海崎地区をはじめ、朝酌川遺跡群を構成する原の前遺跡やタテチョウ遺跡の再整理にも継続的に取り組み、今回示した成果の妥当性をクロスチェックで確認する必要がある。

報告書名	土器・貝・骨		石器		木製品		金属製品		計	掲載率
	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載		
西川津Ⅰ	4	61	1	2	5	0	0	0	73	13.7%
西川津Ⅱ	4	59	1	3	17	12	0	0	96	22.9%
西川津Ⅲ（海崎地区1）	30	138	8	6	1	10	0	0	193	20.2%
西川津Ⅳ（海崎地区2）	48	221	2	40	54		1	0	366	28.7%
西川津Ⅴ（海崎地区3）	36	523	12	81	42		0	0	694	13.0%
西川津Ⅵ	37	204	2	7	22	7	1	0	280	22.1%
西川津Ⅶ	26	115	2	1	15	11	1	0	171	25.7%
西川津Ⅷ	21	173	4	3	10	16	1	0	228	15.8%
西川津Ⅸ	8	20	2	0	5	1	1	0	37	43.2%
西川津・茹捨古墳	38	135	20	16	15	4	1	1	230	32.2%
西川津・古屋敷Ⅱ	56	202	65	50	51	55	1	0	480	36.0%
タテチョウⅠ	25	172	2	13	7	10	0	0	229	14.8%
タテチョウⅡ	13	19	1	1	24	5	0	0	63	60.3%
タテチョウⅢ	78	413	1	19	67	6	1	0	585	25.1%
タテチョウⅣ	55	53	1	2	17	17	1	1	147	50.3%
原の前	16	72	1	3	10	1	3	0	106	28.3%
計	495	2,580	125	247	362	155	12	2	3,978	25.0%

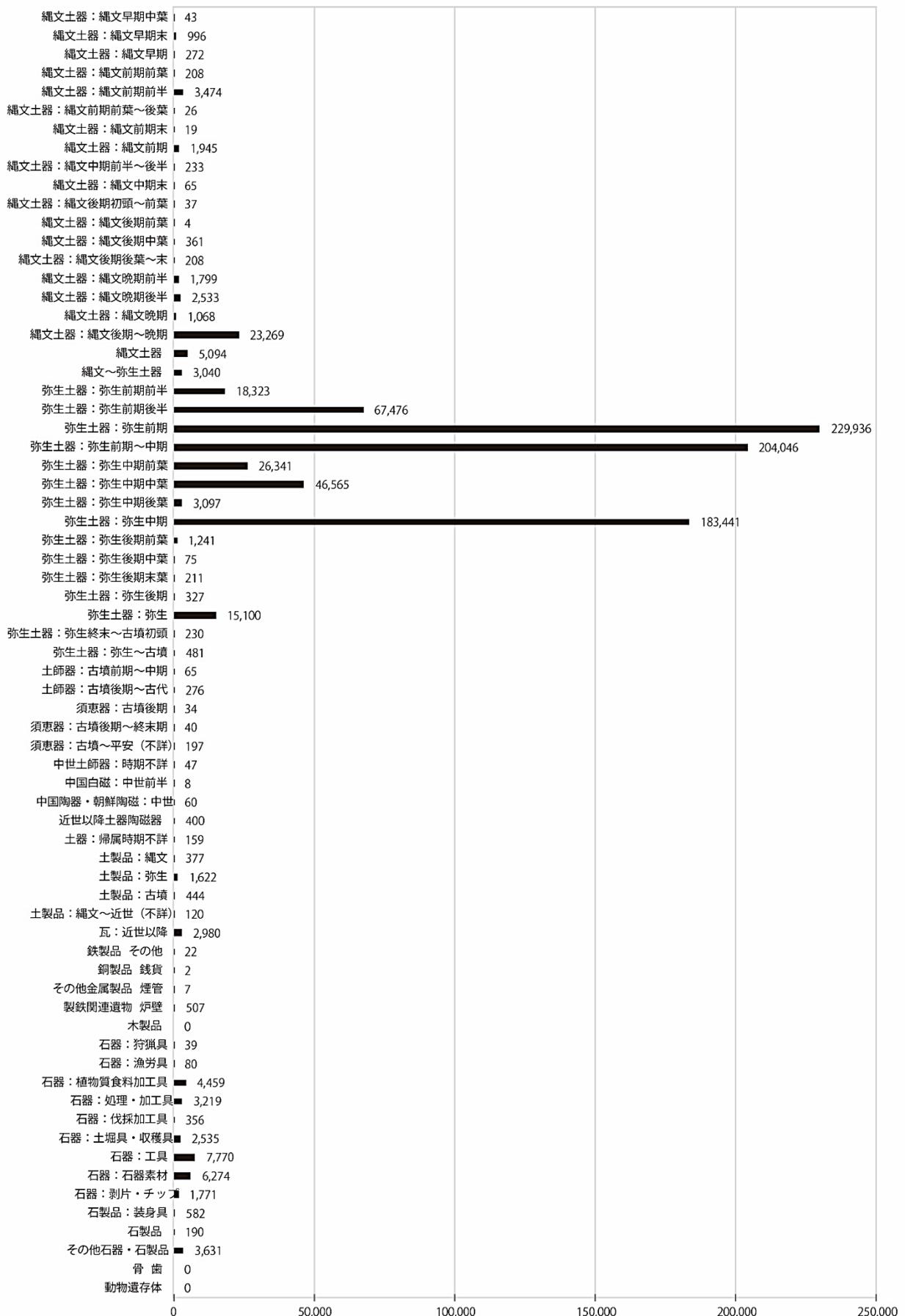
1. 朝酌川遺跡群のコンテナ数概算



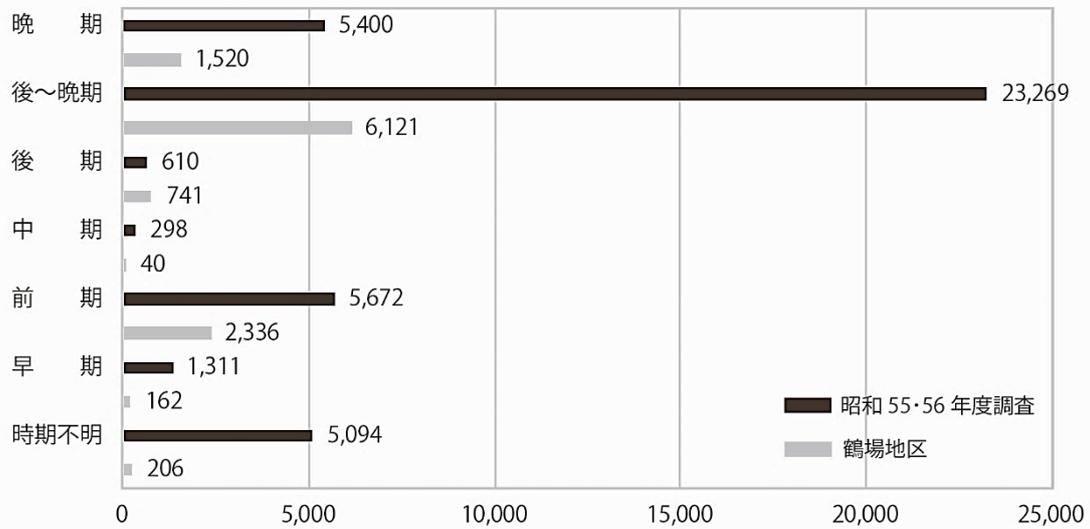
2. 昭和55・56年度の調査区



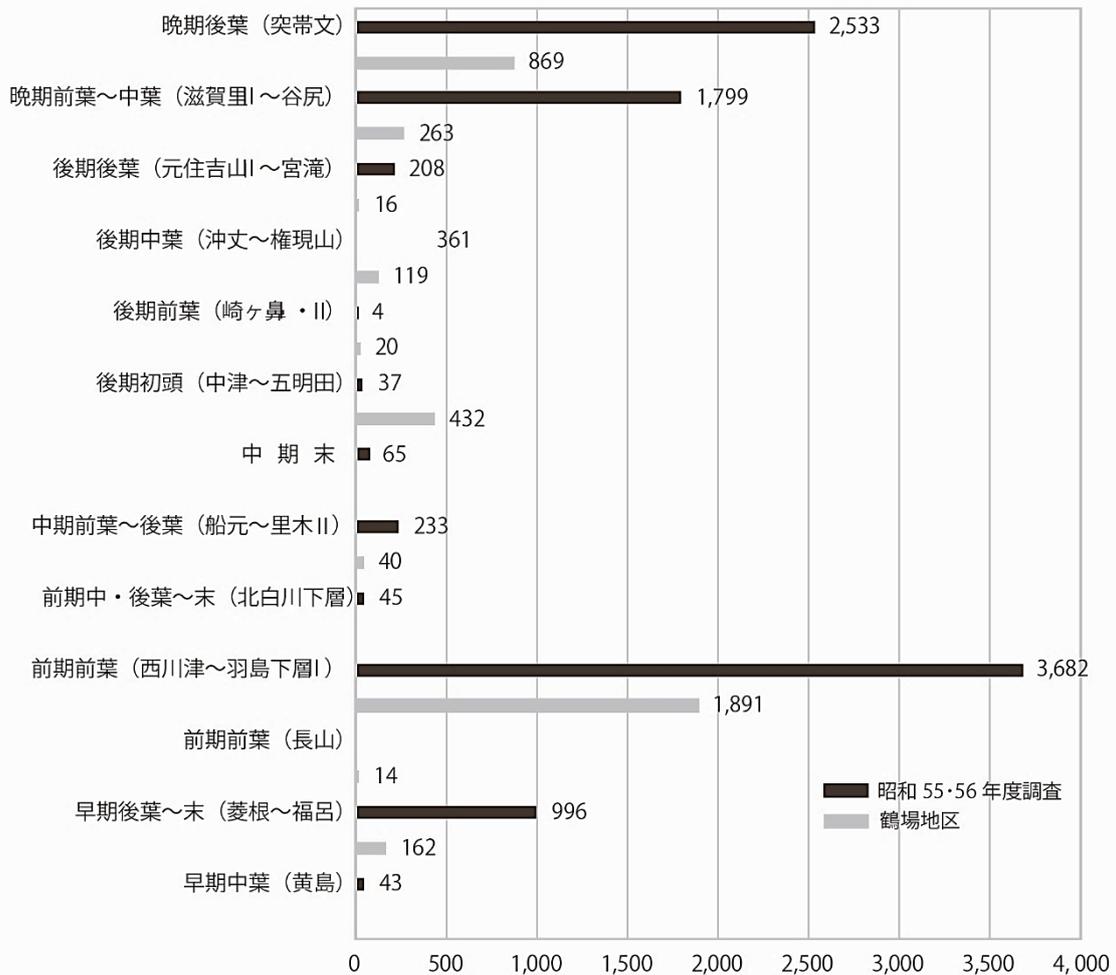
3. 朝酌川遺跡群の調査区配置図



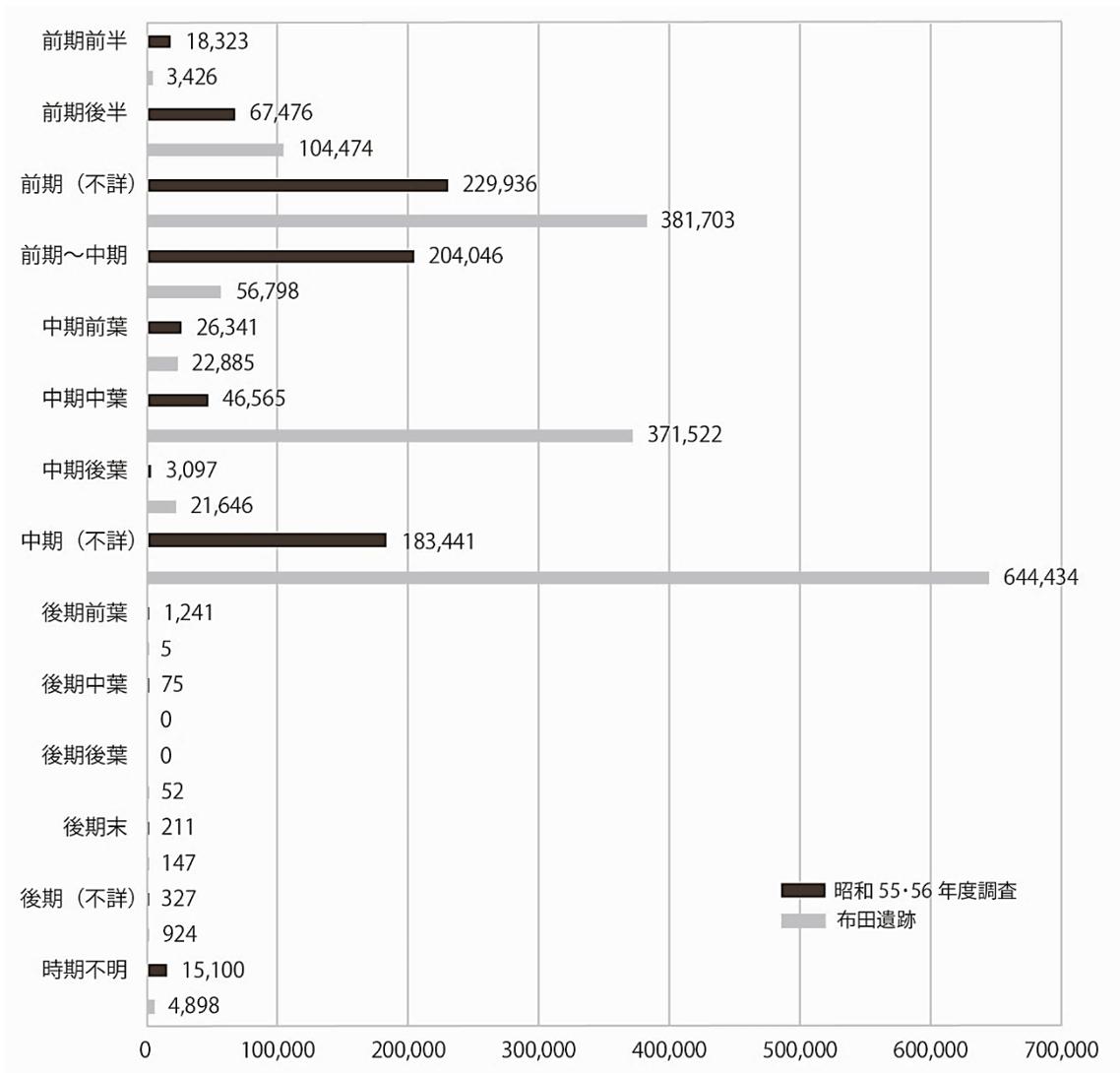
4. 昭和 55・56 年度調査の遺物出土量 (単位：g)



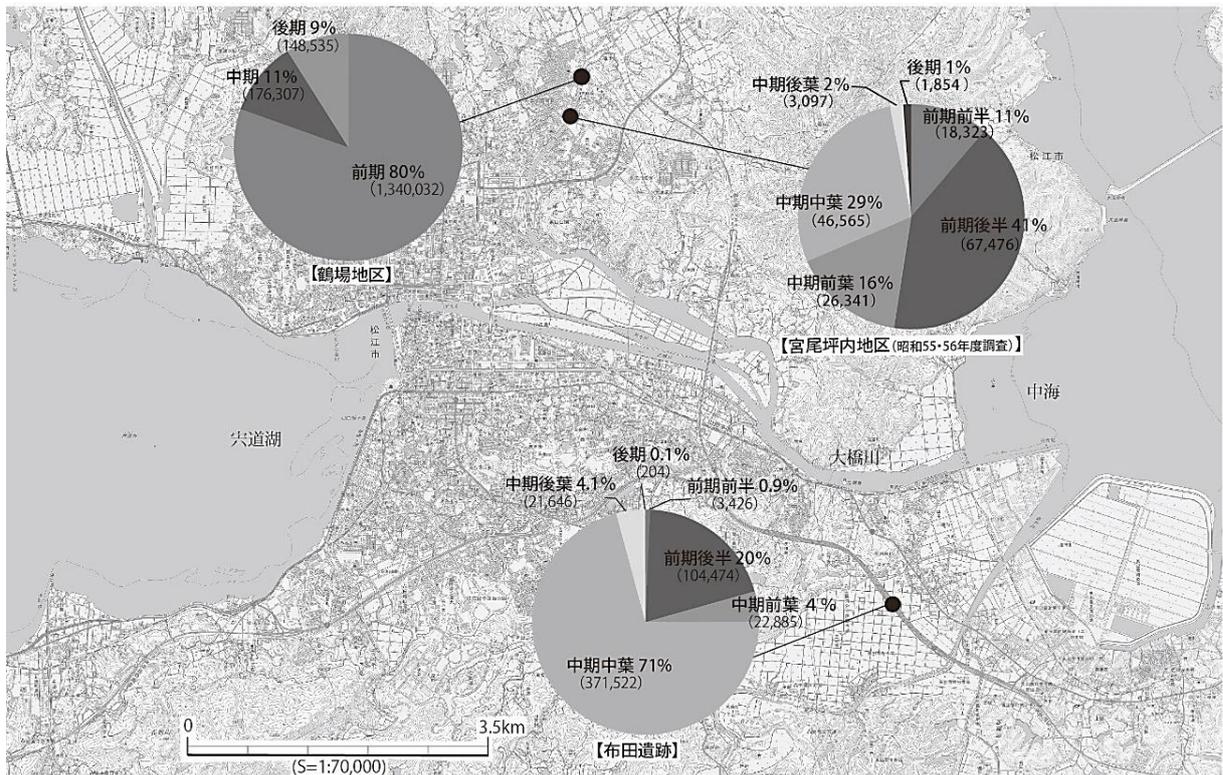
5. 昭和 55・56 年度調査における縄文土器の時期別出土量 (単位: g)



6. 昭和 55・56 年度調査における縄文土器の土器型式別出土量 (単位: g)



7. 昭和 55・56 年度調査における弥生土器の時期別出土量 (単位 : g)



8. 西川津遺跡・布田遺跡の弥生土器の時期別出土量 (単位 : g)

B
C
8
0
0

B
C
1
A
D
1

A
D
2
5
0

時期 遺跡	前期		中期			後期				
	前半	後半	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	末	
西川津遺跡 (宮尾坪内地区)	集落の 成立	集落の 最盛期	集落規模を維持 →			集落の 衰退	集落の解体			
布田遺跡		集落の 成立		集落の 最盛期	集落の 衰退	集落の解体				
西川津遺跡 (鶴場地区)	集落の成立・最 盛期		集落規模の縮小			集落規模を維持 →				

9. 西川津遺跡と布田遺跡の変遷

遺跡 拠点集落 の定義	西川津遺跡	
	鶴場地区・海崎地区	宮尾坪内地区
1. 複数の単位 集団を内包	中核的集落	衛星的な近接集落（単位集落）
2. 集落の継続性	弥生時代前期から後期にかけて、一貫して継続	弥生時代前期に最盛期があるが、中期後葉に衰退
3. 手工業生産・ 交易拠点	豊富な木製品、管玉生産、搬入土器、漆塗り土器、鑄造鉄斧、骨角器、大陸系磨製石斧、太型蛤刃石斧など	豊富な木製品、管玉生産
4. 農耕祭祀・交 易拠点	鳥形木製品、土笛、磨製石剣、分銅型土製品、人面付土器、銅鐸など	鳥形木製品、磨製石剣、（土笛）
5. 首長の存在	玉類、貝輪、威儀具	

10. 宮尾坪内地区と鶴場地区の出土品の比較

時期 事柄	前期		中期			後期			
	前半	後半	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	末
西川津遺跡	拠点集落の成立・盛行				拠点集落の縮小				
布田遺跡	拠点集落の成立・盛行				拠点集落の衰退・解体				
田和山遺跡	→								
高地性集落	→								
青銅器	荒神谷・加茂岩倉				埋納				
墓制	→ 四隅突出型墳丘墓								
気候	安定期				変動期				

→弥生中期後葉の画期性が注目される！

11. 出雲地域における弥生時代の変遷（試案）

いにしえを掘る

島根の埋蔵文化財

〈深田 浩〉

島根県埋蔵文化財調査センター(松江市打出町)は、県内の埋蔵文化財の調査研究拠点として1992年に開設され、いにしえから脈々と続く人々の営みを解き明かしてきた。来年度で30周年を迎えるセンターの調査の中から、大きな成果を上げた遺跡について、現場の担当者に振り返ってもらおう。第1回目はセンター内で今も続く「再発掘」にスポットを当てる。

及ぶ非掲載品は、ほぼ収蔵されたときのままと言わざるを得ません。こうした中、センターでは非掲載品の公開・活用を図るため、全ての遺物の細片1点に至るまで、種類や時期を分類・計測し、重要遺物の再確認なども行う再整理事業を始めました。2017年度からは、山陰地方を代表する弥生時代の大規模拠点集落だった西川津

遺跡出土品の再整理に取り組んでいます。西川津遺跡は松江市北部の朝酌川流域に広がり、昭和50年代から平成20年代の長期間にわたり調査が行われました。出土品は土笛や貝輪、多数の木製品や骨角器など多岐にわたり、銅鐸片や人面土器まで見つかっています。遺跡が「弥生の博物館」と形容されるゆえ

膨大な遺物量には圧倒されていますが、まずは総数が170箱程度の1980、81年度に調査された宮尾坪内地区出土品から作業を行いました。その結果、遺物出土量の推移から遺跡の動態を検証することが可能となりました。遺物量は弥生時代前期後半にピークを示しますが、中期の終わり頃、急激

に減少し、後期はさらに低調になる様子が明らかとなりました。すなわち、西川津遺跡の拠点集落は前期後半が最盛期で、中期末には衰退し、後期にかけて解体していく可能性が見えてきました。この現象が何を意味するかは、今後の山陰地方の弥生時代研究の場で検討していく課題といえます。また、西川津遺跡の他地区の再整理も進め、引き続き拠点集落としての具体像を検証していく必要もあります。まさに宝の山ともいえる、出土品が保管された収蔵庫の「再発掘」プロジェクトが進行中です。

(島根県埋蔵文化財調査センター管理課長) 隔週火曜掲載

メモ

西川津遺跡出土品の再整理成果を報告する講座が27日午後1時半から県埋蔵文化財調査センターである。先着30人。問い合わせ先は同センター、電話0852(36)8608。講座の様子は島根県公式YouTubeチャンネルで公開予定。

①松江市・西川津遺跡



再整理作業が進む西川津遺跡出土品。全部終わるのはいつの日か—松江市打出町、島根県埋蔵文化財調査センター

「弥生の博物館」動態検証

現在、センターに収蔵されている出土遺物の総計は、コンテナ箱でなんと約3万3千箱を数えます。このような膨大な数の出土品は、遺跡からセンターに持ち帰った後の整理作業で、大まかに発掘調査報告書に掲載される資料(掲載品)と、掲載されない資料(非掲載品)に分類されます。掲載品は、報告書の記載に基づき整理・収納し、資